



共通教育通信

KYOTO UNIVERSITY

vol.6
2006 SPRING



巻頭言

プロカウンセラー40年……

「いいかげんのすすめ」

文Ⅱ副学長 東山 絃久

授業紹介

「ポケット・ゼミ」「英語の鬼」

文Ⅱ国際交流センター助教授 青谷 正妥

「特許法入門」

文Ⅱ法学研究科教授 松田 一弘

「スポーツ医科学」

文Ⅱ高等教育研究開発推進センター助教授 田中 真介

研究施設紹介

フィールド科学教育研究センター

文Ⅱフィールド科学教育センター長 田中 克

京都大学教育交流会プロジェクト・活動報告

第2回学生・教職員交流会

先輩からの一言

新入生に向けて

吉田南サークルフェスティバル

サークル紹介

民族舞踊研究会・TRPGサークル「采」

アンブラグド・京都大学11月祭事務局

施設紹介

深く知ること

文Ⅱ副機構長 高橋 由典

巻頭言

プロカウンセラー40年……

「いいかげんのすすめ」

副学長
東山 絃久

仕事が辛くて会社を辞める人はほとんどいない。

人間は群れで生活する動物である。群れには群れの掟があり、掟は時代とともに変わりやすい。掟に従いすぎると自分がなくなる。掟に反すると群れを追い出されるか、群れから離れざるを得なくなる。常に自分と他人、

自分と集団の距離を計っていなければならぬ。これには心のエネルギーが必要である。心のエネルギーが減ってくると、人間関係が煩わしくなり、辞めたくなる。練習が辛くてサークルを退部する人も少ない。

人間は脳を発達させた動物である。脳

の発達は、実在の世界より、バーチャルな世界を拡げる。実在の世界は、自分が存在している場所しかないからである。バーチャルな世界は自分のイメージの世界である。自分のイメージが現実と一致するときはいいが、異なるときは、イメージの方を変えるか、現実を捨てるかになる。自分がイメージしたサー



副学長
東山 紘久 (ひがしやま ひろひさ)

1942年大阪市に生まれる
教育学部卒 教育学博士 臨床心理士
専門は臨床心理学

クルと現実のサークルが異なると思ったとき、イメージをサークルの現実に合わせて、自分のイメージを持ち続けて、退部するかしかなくなる。

イメージと現実が一致することは稀である。自分のイメージが現実と合致していると思っても、イメージだからである。意見や考えが同じように見えても、それぞれが自分のイメージで判断しているのだから、一致しているように見えるだけである。現実・真実とは、数学で言う「真の値」のようなもので、「真の値」はつかめないものである。一致したとしても、それは近似値として一致しているだけである。

バーチャルなものをバーチャルであると考えていると、悩まない。悩んでも仕方がないからである。「真の値」を求め続けると神経症にかからざるを得ない。求め得ないものを求め続けるからである。どれだけ物差しを精密にしても、「真の値」は得られない。物差しをドンドン正確にしていこうとすると、強迫的にならざるを得ない。「真の値」が存在しなければ人間は悩まない。心が乱れるのは、「真の値」が存在するからである。「あるのに求め得ない状況」というのが、人間を悩ませることの一つだからである。近似値で満足するか、諦めるか、それが「真の値」であると、バーチャルなものを現実として、自己満足するかである。

学問は真実を探求するものである。だから、学者・研究者はどこかに強迫的・性格を持っている。真実を、突き詰めて、突き詰めて行くこと

とするからである。強迫的・性格がなければ、学問は追求できない。データの小さな齟齬を、いいかげんにしているわけにはいかない。しかし、データの小さい齟齬にのみ目を奪われて、背後にある大きな理論的齟齬が見えないと、強迫的・自虐的になるだけで、終には研究を放棄してしまいたくなる。かといって、データを都合の良いように改竄したのでは、研究者として失格である。もし、自分の思い描く理論(バーチャルなもの)が、理想的だと思ふのなら、それが真実であるとするデータを導き出す方法を案出する方向に行くべきである。それとも、バーチャルなものはバーチャルなものとして、理論の枠組みを変えるかである。

京都大学のカウンセリングセンターを訪れる人は、全国の大学平均の倍以上である。日本一悩める学生が多いということである。この数字は、物事をいい加減に考えられない人が多いともいえる。まじめに人生を考える人が多いともいえる。頑固で、平均人と違っている人が多いともいえる。

大学に悩める人が多いという結果がどうかは分からないが、京都大学は、ここ50年間、わが国の臨床心理学の指導的役割を果たしてきた。全国に臨床心理学の研究者と臨床心理士を送り出した。これは、また、京文化が関係しているのかもしれない。京都は千年の都であり、タイムスパンを長く考える精神的基盤がある。「京のプブづけ」のように、無いのがあることを尊重する文化もある。二律背反の物事を早急に判断せずに、二つとも生かせる工夫をする文化でもある。

人間は、もともといい加減なものである。いい加減だから可塑性がある。カウンセラーを40年やってきて、「人間の心ほど移ろい易いものはない」との思いと、「人間ほど一度思い込むとこれほど頑固なものはない」との思いの両方がある。いい加減は「チャランポラン」という意味と「良い加減である」との両方の意味がある。風呂の温度は熱すぎても、又ルすぎても気持ちが悪くない。いい湯加減がいいのである。いい湯加減も人によって異なり、万人に合わせようとすると、それこそ水をうめたり熱くしたりと、強迫的になってしまう。強迫的な人が入る湯加減をさせられた人はたまらない。最後にはいい加減(チャランポラン)になってしまう。心を柔らかく柔らかく持ち、二律背反の物事に親近性を覚え、いい(良い)加減な自分を肯定したいものである。



鬼の英語のポケット・ゼミ

カルト集団『幸運の青い谷』

国際交流センターでは、数年前から英語の運用能力をつけるための補講(単位は無いが、センター教員が普通の講義と同じレベルで教えるクラス)を続けています。特に熱心な学生さんたちは、休暇中も集まって英語学習グループを作り、勉強を続けており、僕もこのグループに参加させて頂いていました。正式な講義ではありませんが、既に財界・政界学術界で活躍している卒業生がいるなど、大げさに言えば派閥のような団体に成長しつつあります。

僕の風貌やネタ好きな性格から、『カルト集団幸運の青い谷』(幸運の青い谷は青谷のあだ名のひとつです)などと呼ばれ、ちょっとたけし軍団のようになってきました。因みに団員は「工作員」と呼ばれています。但し、このカルト集団の目的はあくまでも英語の運用能力の向上です。

硬派が集う『英語の鬼』

この良き伝統を継承するとともに、入学と同時に英語の学習習慣をつけて頂くために、新入生セミナー「英語の鬼」が始まりました。新入生セミナーとして提供することにより、単位が出せるという利点も生まれましたが、もともとは自主的な勉強会です。単位は副次的なもので、勉強の機会の提供がこのセミナーの存在理由です。

英語のような第二言語の習得の研究、とりわけ大人による第二言語習得の研究は、過去10年ほどで長足の進歩を遂げ、語彙習

得・構文解析と読解・英作文を中心としたいわゆる学校英語で身に付く力は、ネイティブの運用能力とはまったく違うということが明らかになりました。脳の働きそのものが違うのです。したがって、本セミナーでは最初から大人の英語学習がどういうものであり、実際にどのような学習が効果を上げるのかを説明し、そのフレームワークに則って学習を進めることにしました。

ただし、実際に集うのは毎週90分だけです。それだけで英語の運用力が身に付くはずありません。自学自習が非常に大切で、それなりの覚悟が必要という意味で、恥ずかしいほどベタですが『英語の鬼』というタイトルを付けました。タイトルだけでは不十分だと思ったので、登録の前に面接も義務付けました。「写真家はセッションの前にモデルさんと雑談をします。お互いを知っていた方が、良い写真が撮れるからです。ほくちも同じです」と言葉巧みに新入生を研究室におびき寄せ、「これまでの学習法とは完全に違う」「自分でも勉強しなかつたら絶対に力



著書「英語勉強力」

は付かない」「休むことはまかりならぬ」とくり返して、ある種の洗脳活動を敢行するためです。定員は30名でしたが、あつという間にそれを大幅に超えて、気が付いたら三桁に迫っていました。最初から学習グループにいた上回生ももちろん出て来るので、大変な大所帯です。これでは收拾がつかないのですが、「来る者は拒まず」主義の僕は窮余の策としてクラスを二つに分けることにしました。つ目は16時半から18時、二つ目が18時15分から19時45分です。新入生セミナーの受講者はつ目、英語学習グループの参加者は二つ目が基本ですが、一旦ふたを開けてみると移動を希望する人も多くいました。建前はともかく、結果的には、回生と先輩達の交流が出来て、とても良かったと思っています。それにしても、金曜日の18時15分から19時45分とは、ほんとうに硬派な勉強会だと思いませんか？

口から血を吐くほどやる

読書聴話の四技能をまんべんなく向上させるのが目的ですが、実際の授業では二人ではやりにくい聴話が中心になりました。聴解にはノーマルスピードの2/3の速さで読まれてくるVoice of Americaという放送局の番組を主に使い、話す練習はpair work(二人組で練習するもの)を中心に行いました。ほとんどの学生さんはノーマルスピードの英語には太刀打ちできないので、ノーマルスピードのディクテーション(学生さんには到底無理なので、僕が黒板でやってみせる)も授業に組み込みました。さらに、目の前には生身の人間の英語による語りかけも大切ですので、毎回僕

が雑談や経験談を10分以上語りました。講義その物は主に英語で行い、日本語は必要最小限に止めました。宿題も充実しており、リスニングが毎週2時間、30分の課題作文が毎週一つ、そして毎週1万語のリーディングがありました。これくらいやらないと力は付きませんし、1回生のうちならこれくらいは時間には取れるからです。

日本の大学生はなまぐらで有名ですので、きっと欠席者が続出するだろうと思いましたが、予想に反して30名弱しか脱落者は居ませんでした。「口から血を吐くほどやる」「足腰が立たなくなるほどやる」とともに、「死ぬまでやる」の婉曲表現です。笑。「許さない」がモットーの僕ですので、無断欠席者はほとんど切つていきました。そういう徹底した硬派アプローチが幸いしたようです。居眠りをした学生に僕が怒りを爆発させて講義を途中でやめるなど、色々な事件が有りましたが、

- 1 英語でなされる英語の授業は初めてだった。
- 2 英語の勉強法が良く分かった。
- 3 ディクテーションなどを通して、自分の英語力の無さが良く分かった。
- 4 勉強の習慣がついた。
- 5 先生は理系なのに高校の英語の先生よりできるので驚いた。
- 6 京大の教員は一味違う。
- 7 しんどかった。
- 8 厳し過ぎる。

70名近くが最後まで講義に出てきたのは、教える側として非常に嬉しく思いました。

AB型が講義で炸裂

学生さんに書いてもらった授業の評価や感想を上に表示しました。

11回しか授業がありませんから、これだけで英語力が大幅に伸びた人は非常に少ないはずですが、しかし、英語を勉強する動機や機会を与える、また英語の勉強方法を教えるという所期の目的が達成されたのは1、2、3、4で良く分かります。特に1で分かるように、英語を多用した英語の授業は多くの学生さん達にとって、斬新でシヨッキングですらあったようです。5と6は僕についてのコメントですが、5は文献もすべて英語である理系の方が英語が必要だという事実を知らないためのリアクション、6は僕が変わり者だといっただけですが、こう言われるのは愉快です。AB型が講義で炸裂していたのでしようね。いずれにせよ、最後まで付いて来た人達は、各自それなりの物を当セミナーから得たと言つてよいでしょう。しぶとさは大切ですね。

講義は7月8日で終わりましたが、7月29日には、講義の締めくくりとしてカンフォールの一部を借り切つて夕食会(学生さんは無料)を行いました。試験中にも拘らず、25名が参加し、盛況でした。

人間は英語を喋るものである

最後に、セミナーは前期だけです、英語の勉強会は一年中やっており、新入生セミナーを取つた人たちが何人か参加しています。勉

強会のみに参加する事も可能ですので、僕のセミナーを取らなかつた人も、覗いてみてください。ただし、週一回の勉強会に参加するだけでなく、自分でその数億倍の努力を重ねなければ英語の運用能力の獲得は到底不可能であるのは、言うまでもありません。今や国際社会では「人間は英語をしゃべるものである」が常識となっています。僕が学生だった30年前には「英語ができればなお良い」と言っていた企業も「英語ができなければ始まらない」とせっぱ詰まって来ました。そんな中、日本を代表する大学のひとつである京都大学の学生さんの危機感の薄さに、僕は強い危機感を感じずにはおれません。

と一言訳で、「工員モトム！」



国際交流センター 助教授
青谷 正妥(あおたに まさやす)
1954年大阪市生まれ

本学理学部卒業後、同大学院在学中に渡米。20年をアメリカで過ごす。本来の専攻は数学だが、英語教育や国際教育でも活躍。スケボー・魚すくい・野球など研究以外の趣味も多い。TOEFL/TOEIC満点で、「平均的京大教員の一億倍、アメリカ人の一億分の一」の英語力。

ホームページ <http://aoitani.net/>

法学研究科 教授 松田 一弘

はじめに

21世紀は「知的財産の時代」といわれています。科学技術が高度に発達した豊かな社会では、特許を初めとする知的財産（無体財産）の価値が必然的に高まります。そして、経済のグローバル化により、その価値は層増大します。

このため、世界の多くの国々で、知的財産の保護政策が強力に推進されることとなります。メガコンペティション（大競争）に勝ち抜くため、企業は、知的財産権の獲得競争をグローバルに展開します。現在では多くの場合、企業の価値は、その保有する有形資産ではなく知的資産で評価されます。

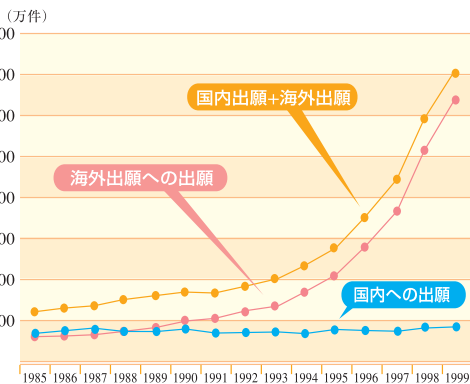
このような時代にあつては、特許についての知識は、将来、自ら発明者となる理系学部の学生や、法律家を目指す学生に必須あるだけでなく、国の政策立案や企業の経営への参画を目指す学生にとっても、極めて重要といえることができます。

特許法入門の講義は、単に、法律としての特許法を記憶するのではなく、21世紀に求められる知財に関する知識・情報を幅広く学ぶことのできる構成としています。平成17年度は9学部の学生が受講しました。来年度は、全学部となることを希望しています。

本稿では、授業でも触れている、最近のトピックスをいくつか紹介しましょう。

特許出願の爆発

毎年、世界中で約80万件の発明が生まれませんが、前述のような知的財産の価値の増大を受けて、自国で特許出願されるだけでなく、外国にも出願される件数が急増しています。左のグラフをご覧ください。この右肩上がりの増加は、



● 特許出願件数 (全世界)

「特許出願の爆発」とまでいわれています。

もっとも、このグラフ中の海外出願には、特許協定条約 (PCT) (※注1) による指定国が単純に合算されていますので、指定国において実際に特許取得のための手続きが行われず、これを差し引いても、各国の特許庁は、嬉しい悲鳴を通り越して、その対応に追われています。例えば、米国特許庁は、毎年のように数百人規模の増員をしています。日本の特許庁も、厳しい行政改革の中で、任期付き審査官5000名の採用が特別措置として認められました。

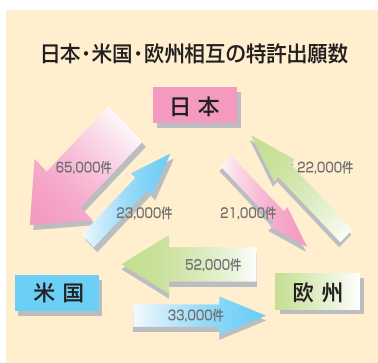
しかし、それだけではとうてい対応できません。現在、日米欧の特許庁は、この状況を克服すべく真剣な協議を重ね、審査結果の交換などの審査協力を推進していますが、現在までのところ状況の悪化に歯止めはかかっています。この先どうなるか、関係者は、固唾をのんで見守っています。

日本企業の頑張り

日本の企業は、バブルの崩壊により、過去十数年間たいへんな苦境にありました。これに伴って特許出願件数は激減したのでしょうか？ 皆さん、どう思われますか？

実は、このような厳しい環境の下でも、多くの企業は、社運をかけて研究開発を推進し、多数の特許を出願しています。国内への特許出願は、世界最多の水準(年間約40万件)を維持し、海外への特許出願は、大幅に増加しています。

米国特許商標庁の統計をみると、この厳しい期間内にも、特許権を取得した上位10社には、誰でも知っている日本の著名な企業が半数以上含まれています。左の図は、日米欧の間



● 出典：特許庁ホームページ

での特許出願件数(2004年)を示しています。日本の企業の奮闘振りがご理解いただけることと思います。

職務発明

左上の記事を覚えておられる方も多いことでしょう。有名な中村修二現カリフォルニア大学教授の「青色発光ダイオード」に関する訴訟の東



大学院法学研究科 教授
松田 一弘 (まつだ かずひろ)

1946年生まれ 大阪出身
専門分野: 知的財産権法
趣味: 旅行

京地裁判決の新聞報道です。近年、「職務発明」(※注②)を巡る訴訟が急増し、発明者に対して多額の支払いを命じる判決が多数出ました。訴訟の増加の原因は、終身雇用制の崩壊、発明者の権利意識の向上などにあるといわれています。もちろん、多数の優れた発明が、日本で生まれていることがその背景にあります。そして、もう一つの原因は、法律です。日本の特許法は、職務発明について、特許を受ける権利は発明者に帰属すること、企業などの使用者はその発明を無償で実施する権利を取得すること、発明者が職務発明を使用者に承継させたときは、「相当の対価」の支払いを受ける権利を有することなどを規定しています(諸外国の法律では、職務発明は企業などの使用者に帰属するとされているのが普通です)。この点で、日本は発明者を大切にしている国といえます。

ところが、現実の訴訟を見ると、発明が生まれる過程やその実施の状況はまさに千差万別で、職務発明の「相当の対価」について、その適正な金額を決定することは、極めて困難なケースがほとんどです。費用と時間を要するだけでなく、当事者いづれもが納得しない、ということも少なくありません。このため、特許法が改正され(日17年4月施行、今後は、当事者間の自主的な取り決めに従って相当の対価が支払われた場合には、不合理でない限り、尊重されることになりました)。

現在、多くの企業で、相当の対価の支払額を引き上げたり、その上限を撤廃するなどの動きが見られます。ある企業では、研究者と営業職員の給与が引き上げられる一方、その他の職員の給与が引き下げられました。これにより、従来以上に優れた発明が生まれることが期待されています。

ちなみに、新聞報道の訴訟ですが(この事件には改正前の法律が適用されます)、東京高等裁判所(現知財高裁)に控訴され、約6億円プラス延滞金約2億円で和解が成立しました。裁判所の和解勧告に従ったものですが、裁判所にとって極めて困難な事件であったことは確かです。

大学と特許

「象牙の塔」という言葉があります。大学は、教育と学問の府であり、その研究成果は、論文などを通じて広く公開されるべきである、というのが世界の大学の伝統的な考え方でした。しかし、近時、大学で生まれた発明は、特許権を確立して、その活用を図ることこそが、社会に対する大学の使命をよりよく果たすことになると考えが生まれました。この考えは米国に始まりましたが、現在では、全世界の大学に広く普及しています。

本学も、学内で生まれた発明の権利化と活用を積極的に推進しています。詳細は、ホームページの「京都大学知的財産ポリシー」、「京都大学発明規程」、「京都大学産学官連携ポリシー」

※注① 特許協働条約(Patent Cooperation Treaty)。締約国の一つに特許出願すると、指定国にも出願したものとみなされる条約。指定国での実際の手続きは30ヶ月後に開始されます。

※注② 職務発明とは、企業の従業員や役員、あるいは国、地方公共団体、国立研究所の職員がその職務としてした発明をいいます。

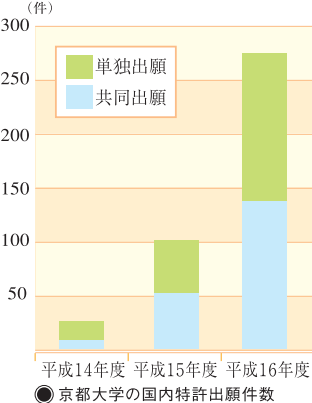
また、近年、大学の研究者が、自己の発明を自ら実用化するためにベンチャー企業を設立する動きが活発化しています。本学でも、「京都大学ベンチャービジネス・ラボラトリー」が中心となつて、大学で生まれた発明を孵化し、新産業の創設を支援しています。

京都大学からどのような発明が生まれ、どのような新産業が育つか、大いに期待されています。



H16.1.31 朝日新聞朝刊

現在、多くの企業で、相当の対価の支払額を引き上げたり、その上限を撤廃するなどの動きが見られます。ある企業では、研究者と営業職員の給与が引き上げられる一方、その他の職員の給与が引き下げられました。これにより、従来以上に優れた発明が生まれることが期待されています。



など)に発表されていますので、ご覧いただきたいと思ひます。

現在では、多くの発明が大学に承継され、国



スポーツ医科学

高等教育研究開発推進センター 助教授 田中 真介

「1歳児は、どうして二足で歩くことができるようになるのですか?」。大学院のゼミのときに、指導教授は私にこう尋ねられた。私は神経生理学や運動科学の知識をもとに、「それは、感覚情報をもとに脳の運動関連領域のニールンが神経回路網を形成して電気信号を発し、それが四肢の筋細胞に伝わって筋収縮を起こし、それが全身のバランスを取った上で左右の手足を交互に制御し」といった、個体の内部の脳―神経―筋の機能を答えたように憶えている。

「いえ、違うと思うんですよ」と教授は微笑みながら、「道草です。」と言う。

「真介さん(私はこう呼ばれていた)、1歳児が歩くところを見たことありませんか?」。私は、修論の研究のために保育所や家庭で1歳の子どもたちのビデオを撮らせてもらって、何十人もの1歳児たちが歩くところを何度も見ていた。「二足歩行の原因」として、歩行の神経制御機構以外に、どんな答があるというのだろうか。

「子どもたちは、途中で立ち止まっては五月の風の涼しさに顔をほころばせ、道端に小さな花を見つけては、しゃがんで自分の小さな手でそれをつまんだりついたりしてみよう?。そして、指さしをしながら、あなたの方を振り返ったはずです。つまんだ小石を投げて「タッ」と言ったり、好きな人を見つ

ては倒れ込むようにして駆け寄り、その人の胸に顔を埋め、そのあとに新しい未知の世界を振り仰いで、そしてまた新たに歩き始める。それが1歳児の歩き方ではありませんか?」

その経験の総体が、その密度の高さが、人類が培ってきた生活のすべてが、保育や療育のカリキュラム、両親や保育園の先生方、また同じクラスの仲間たちとの交流が1歳児を歩かせるんです。脳の神経回路網は、運動の原因ではなくて、むしろ結果として形成されたものです。

京都大学で生まれたこの行動の構造、発達の機構についての見方は、世界に類例を見ない発達の理論となつて、わが国の保育・教育実践、また障害をもつ人たちの療育実践を支えることになった。さらに、あらゆる人に発達への権利をみとめ、それを人類に共通の普遍的価値とし尊重し保障しようとする思想として結実し、「九八六年に国連総会で採択された「発達権宣言」の二つの重要な源流をなすこととなった。

人間の発達についてのこのような学問の深まりを受けて、「スポーツ医科学」の講義では、人間の「運動」に関連する脳の諸機能を取り上げ、内的な神経系の機構について考察するだけでなく、それらの諸機能はどのような社会的な機構によつて形成され発達していくのか、そしてその機能は人間にとつてどのよ

うな発達のな意味をもつのかについて講義する。主たるトピックスを以下に紹介する。

①「脳の進化」では、地球の歴史の中でどのようにして脳が形成されてきたかを取り上げる。地球そのものが、小惑星の衝突によつて運よく作られ、さらにはいくつもの偶然と自然的・社会的な諸条件が重なつて、現在のような脳を持つ人類が生まれた。同時に、この脳そのものが、歴史を発見する力をもつて過去を形成し、自らの生い立ちを実証し創造するに到る。過去は先験的に存在するのではなく、脳によつて構成され、進化の過程で新たに再構成されるとともに、個体発達の過程で随時編集され更新され新たに発見される。

②「感覚・知覚」では、「見る」とは何かを取り上げる。近年、網膜の光受容細胞の分子機構が明らかとなり、大脳皮質の後頭葉から側頭葉にいたる視覚シグナル伝達の過程が解明されてきた。しかし、「見る」ことを含む感覚・知覚の働きは、単なる情報の受容ではなく、能動的に情報を作り出す働きをしている。例えば人間は、壁のシミにも人間の顔を想像し仮構する傾向がある。一方、われわれは自分が知っているものだけ、自らの認知機構によつて捉えられる構造だけを対象の中に見出す。知らないもの、見たことがないもの、認識できないものは目の前にあっても意識することができない。チンパンジーなど霊

長類乳幼児の学習実験でそのような知覚の特質を例証する。

③「記憶と学習」では、記憶障害の事例を紹介する。脳血管障害などによって前行情健忘症になった患者たちは、発症以後に新たに経験したことを憶えることができない。それによって日常生活の中で、さまざまな問題と直面することになる。特に、「時間の流れの中に自分を位置づけることができない」、「空想と現実の区別がつかずに混乱する」と訴える。そして何より、「自分の子どもたちやまわりの友人たちとの関係が確認できない」ことに毎日気づかされ動揺する。

実際には何日も何年も時間は経っているのに、経験したことをそのつど数十分で忘れていくために、いつも発症の時点で人生の時計がリセットされてしまい、それ以後の経験、特に発症以後に交流した人たちとの温かな人間関係の記憶を、情報として脳にストックすることができないのである。このことから、記憶の働きが、脳での情報の貯蔵や検索といった内的・生理的機構であるだけでなく、人間が自分自身を時間的・空間的・社会的に定位して自己確認させていくという重要な意味をもっていることがわかる。これは、高齢期での認知症など、記憶障害を伴う脳疾患に対する基礎的な援助方法改善の手がかりを与えるだろう。

④「感情」は通常、喜怒哀楽など、快不快を両極とする心の状態と考えられてきた。その中枢制御機構として、大脳辺縁系から間脳の視床下部、そして前頭葉に到るニューロンネットワークの機能が明らかにされていく。特に、快不快の感情を生み出す際、ま

ず最初に、感覚情報を大脳辺縁系の扁桃体のニューロンで受け取り、感覚情報を与えた対象が自分の生命活動を維持することに寄与するものか、そうでない危険なものかによって特異的に特定のニューロンが異なる応答をするのが発見された。この応答系はいわば、自分にとっての「価値」を判断し、その経験を記憶するシステムといえよう。対象の価値を判断する力、対象を価値づける力を得ることは、自分自身の価値を発見する力につながる。したがって、感情表現とそれによる社会的な交流は、自己・主体の形成と確認のための重要な契機となるだろう。

⑤最後に、わが国の誤った医療政策によって脳機能の重篤な損傷を受けた事例をもとに、制度改革の課題について考える。特に京都では、第2次世界大戦後間もない一九四八年に、ジフテリア予防接種によって1〜2歳児を中心に幼児68名が死亡し、重症者が総計二千名以上に及ぶ世界史上最大の予防接種事故が起こった。事件発生の原因はワクチン製造過程での無毒化のミスとされたが、当時ワクチン接種の必要性はなかったこと、またワクチンの検査システムに重大な不備があったことが新資料によって判明した。さらに、事件発生直後に法務庁が厚生省に、わずかな慰謝料によって被害者の訴訟提起を放棄させることを指示した内部文書を紹介する。

この事件を闇に葬ることに成功してしまつた厚生省は、その後、一九六〇〜七〇年代に種痘接種禍事件、一九八九年〜九三年にはMMR新三種混合ワクチン被害事件ほか、幾多のワクチン接種禍事件、さらにエイズ葉害事件等を次々と引き起こすに到る。これ

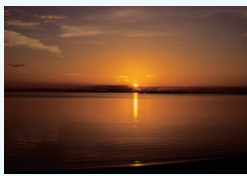
らの社会問題の検討を通して、日本国憲法にも謳われているような、人間の生命と健康と発達を保障する社会を実現するにはどうすればよいかを考えていきたい。

高等教育研究開発推進センター 助教授 田中 真介(たなか しんすけ)

大学院人間・環境学研究科、認知・行動科学講座を兼任。学生部スポーツ指導・相談室では健康相談、スポーツ指導相談を担当している。

専門は発達論、神経科学、障害児教育学。脊椎動物の神経系の進化と発達、人間の乳児期から幼児期・児童期・思春期に到る運動・道具利用・言語の発達連関の機構と、それらの発達を保障する社会的環境のあり方について研究している。

学外では京都府立養護学校の心理専門相談員。また、日本各地、特に南西諸島、沖縄の離島の小中学校で発達相談活動を行う。海外では東南アジアの東ティモールなどの発展途上国で、独立紛争後の復興支援のためのNGO活動に参加。



写真は沖縄・鳩間島の朝の海を始め、田中先生が沖縄の各地で撮影されたものです。

フィールド科学教育研究センター

フィールド科学教育研究センター長 田中 克



右ページ写真 ② 北海道研究林における冬季森林実習
左ページ写真 ⑤ 瀬戸臨海実験所附属水族館

③ 芦生研究林の研究管理棟 ④ 舞鶴水産実験所遠景
⑥ 古座川調査風景

① フィールド科学教育研究センターを構成する現地施設の配置

北海道研究林：北海道の東部に位置し、釧路市の北北東約45kmの標茶区と西約40kmの白糠区の2箇所よりなる。気候は夏季の濃霧や冬季の乾燥した厳しい寒さ、最低気温はマイナス30℃近くで特徴づけられる。釧路湿原、阿寒、知床の3つの国立公園と至近距離にあり、その地域特性を生かした天然林の林分動態、森林の垂直分布、火山性土壌、凍土・雪氷等に関する実習が行われている②。

フィールド研の現地施設は、北海道2、京都府4、和歌山県3、山口県1の合計10施設よりなる①。これらの中で、森里海連環学実習やポケット・ゼミの拠点となっている施設の概要は以下のとおりである。

重要施設の紹介

③ 新たな統合学問領域「森里海連環学」の創生を展望した施設である。以上のような特徴を生かし、教育面においては現地施設におけるフィールド実習をベースにした全学共通教育に力を注いでいる。とりわけ「森里海連環学実習」や毎年10教科目を提供している新入生向け少人数ゼミナー（ポケット・ゼミ）を各地の現地施設において実施し、自然から学ぶ機会を充実を図っている。

② 多くのセンターの中で、名称に「教育」を冠した数少ない共同利用施設である。
① 北海道から山口県に至る遠隔地の現地施設を拠点にした組織である。

フィールド科学教育研究センター（フィールド研）は、2003年4月に理学研究科に附属していた瀬戸臨海実験所、農学研究科に附属していた演習林・亜熱帯植物実験所・水産実験所を統合し、新たな全学共同利用施設として発足した。本学には多様な教育研究施設が存在するが、フィールド研は以下の特徴を持つ施設として個性を発揮している。



フィールド科学教育研究センター長

田中 克 (たなか まさる)

1943年生まれ 滋賀県出身

専門分野：海洋資源生物学。稚魚の生理生態研究。有明海特産種稚魚の長期研究より、大陸沿岸遺存生態系仮説を提唱し、森里海連環学の創生を展望。

瀬戸臨海実験所：紀伊半島西岸白浜町の田辺湾口に位置し、無脊椎動物の系統分類学・生態学・発生学・保全生物学などの自然史研

究が進められている。また、わが国の臨海実験所で唯一附属水族館を持ち、年間6万人の入館者に研究成果を公開し、本学の中で最も広く社会に開かれた施設として重要な役割を担っている。理学部向けの臨海実習、全学共通科目向けの実習、全国向けの公開臨海実習等を提供している⑤。

若生研究林：京都府の北東部に位置し、氷河期の遺産的植物も含めてその種類数は極めて豊富であり、原生的な天然林として貴重な存在である。フィールド研の全学共通教育の他に、農学部・理学部・総合人間学部等の実習や他大学の实習などに幅広く利用されている。本研究林は由良川流域にあり、その河口域近くに位置する舞鶴水産実験所との間で森川海つながりに関する教育研究の推進が展望されている③。



舞鶴水産実験所：日本海沿岸のほぼ中央に位置する舞鶴湾内にある。由良川が流入する若狭湾西部海域を主要なフィールドにした魚類・ベントス類の生態や行動ならびに仔稚魚の飼育実験的研究が進められている。また、当実験所には30万点にのぼる魚類標本が収蔵され、魚類の分類学的研究も進められている。近年、社会的要請に応じて小・中・高生ならびに市民向けの教育や講演活動が積極的に進められている④。

森里海連環学実習

以上の現地施設とともに、研究林系の施設として京都市内には上賀茂試験地と北白川試験地(北部構内)、和歌山県清水町には和歌山研究林、山口県周南市には徳山試験地を有している。これら全国10箇所の遠隔地施設間の連絡調整や企画全般に関わる本部は、北都構内農学部総合館(北東角)に存在する。

相の史的解明や黒潮文化圏における資源生物複合の保全研究が進められている。最近では森里海連環学の柱の1つとして清流古座川をモデルにした「古座川プロジェクト」の研究拠点として重要な役割を担っている⑥。

紀伊大島実験所：紀伊半島南端串本町にある紀伊大島のほぼ中央部に位置する。暖流黒潮の影響を受け、気候は温暖で所内にはスタジイやヤマモモなど照葉樹が繁茂する。紀伊大島生物

とを目的に、京都府北部の由良川水系(若生研究林・舞鶴水産実験所)、和歌山県南部の古座川水系(和歌山研究林・瀬戸臨海実験所)、紀伊大島実験所、北海道東部の別寒辺牛川水系(北海道研究林・北海道大学厚岸臨海実験所)において、夏季集中で実施されている。2005年度より、本実習は京都大学フィールド研と北海道大学北方生物圏フィールド科学センターの連携のもとに取り組み、両大学よりほぼ同数の学生が参加する形となっている。いずれの実習も現地施設をベースにフィールド観察・講義・成果発表・レポート作成などを通じて、自然と自然や人と自然の有形・無形のつながりの重要性を知る機会として、その教育効果は大変大きいと評価される。特に、最近では子供の頃に自然と触れ合う経験が少ない学生にとつて、1週間のフィールド実習は、各々が自然と関わる、原体験ともなっている。年を追うごとに実習のフィールドとなる地域社会の関心も高まり、いろいろな協力の輪が広がり、地域教育としても注目されている。

施設利用等の詳細は

フィールド研本部(企画情報室)

TEL 075-753-6420 にご連絡下さい。

フィールド研情報は下記まで

<http://www.fserc.kais.kyoto-u.ac.jp/>



京都大学教育交流会プロジェクト

トでは、昨年の第1回学生・教員教育交流会「あなたは京大に何を求めますか？」(詳しくは「共通教育通信」Vol.3を参照)での問題提起を受け、それからの約1年間、学生と教職員が協力しながら4つのワーキンググループ(WG)に分かれて、京都大学の新しい教育のあり方、学生の学びのあり方を探求するための活動に取り組んできました(『共通教育通信』Vol.4、Vol.5に詳しい活動報告が掲載されています)。これらの活動の成果を広く発表するとともに、さらに新たな展開へと結びつけていくことを目指し、学生と教職員とがより幅広く交流しあう場として、去る10月15日(土)吉田南総合館北棟にて、第2回学生・教職員教育交流会「京大の教育の今・これから」(学生の声の届かせよう)が開催されました。

当日は、あいにくの雨天にもかかわらず、他大学からも含め学生・教職員あわせて約70名のご参加をいただくことができました。プログラムは第1部(全体会)、第2部(3つの分科会)の順に進みました。

■川島昭夫先生の講演「教養は必要か？」

第1部では、吉田純先生(高等教育研究開発推進センター教授)が総合司会を担当し、まず、川島昭夫先生(人間・環境学域研究科教授、ご専門は西洋史学・イギリス近代史)から「教養は必要か?」というテーマで基調講演をいただきました。川島先生は、「自身の青春時代の回顧と歴史を学ぶ」ということの意味を踏まえ、た上で、教養とは単なる知識ではなく「自分という容器を収容しているもっと大きな容器(世

第2回学生・教職員教育交流会

京大の教育の今・これから

〜学生の声の届かせよう〜

界、歴史)と自分をつなぐもの」であり、自分(自民族や自文化)を相対化し、過去と自分との間の距離をはかることができるような「もう一つの視点」をもつことであると話されました。大学の「教養教育」あるいは「教養科目」を学ぶということの本質的な意味について、多くの聴衆が深い示唆を受けたのではないかと思います。

■交流会プロジェクトの二年間の活動成果

つづいて、プロジェクトの1年間の活動成果として、WG1からは「京都大学教員オフィスアワー検索システム」(稼働中)の現状と今後の課題について、WG2からは「2回生進級時アンケート」(4月に実施の概要報告書の作成および教員インタビューの結果について、WG3からは他大学の調査比較および交流活動(とくに大阪大学との合同イベント「合同ゼミ」)について、WG4からは平成17年度「自主研究ゼミ」の内容について、それぞれ報告がありました。ついで、この「自主研究ゼミ」の優秀者として、羽山裕子さん(教育学部1回生)が「本離れ」(現代日本人の読書実態について)、森田昌樹さん(理学部1回生)が「光触媒を用いた太陽光発電による環境負荷の軽減とその評価」というテーマで、それぞれ発表をおこないました。二人の1回生の堂々としたプレゼンテーションぶりに、同は強い感銘を受けました。

分科会の議論とまとめ
以上で第1部を終え、休憩をはさんで、第2部では3つの分科会に分かれて討議をおこないました。

分科会1では「自学自習とは何だろうか?」を主題とし、学生の授業における意欲や態度の問題(意見表明を嫌がるなど)、知的な「探求」や「広がり」を学生にどうもたせるか、全学教育に対する期待とは何なのか(高校までの「勉強」とは違う「学問」とは何か)、そして教員・学生が対等に話せる場としての自主ゼミの効用などについて議論がおこなわれました。京都大学が理念とする「自学自習」とはどのようにすれば実現できるのか、そのために解決すべき課題は何かということが、この分科会の一貫したテーマであったと言えます。

分科会2では「学生と教員の「ズレ」を解剖する」と題して議論がおこなわれました。具体的には、たとえばA群科目において、学生は広く体系的な「知識」の獲得を求めているのに、教員はたとえトピックを絞つてもその分野の基礎となる「考え方・見方」を伝えたいと思っていること、また教員は定説を書き換えていく研究者でもあるので、その分野を定めた体系として概説的・教科書的に述べることに肯定的であるといった「ズレ」が指摘されました。さらに、「こうした「ズレ」を埋めていくために、教員の考えや方針が学生にきちんと伝わるようにシラバスを改善し、学生が自分





のニーズに合った授業を選択できるようにすべきたなどの問題提起もありました。

分科会3では「成績評価の質を問う！」をテーマとし、現行制度への不満・要望（成績評価の基準や方法が不透明である、成績についての異議申し立てを保障する必要性など）、大学のおかれている状況や変革に関する意見（アメリカでのGPA制度の導入など）が話題となりました。全体のまとめとして、学生へのフィードバックの必要性、また学生の変化に応じて成績評価も変わっていくかなくてはいけないという点が指摘されました。

3つの分科会を終えた後、全員が再度メイン会場に集まり、それぞれ司会と書記を担当した学生実行委員が各分科会の議論の内容を報告したのち、林哲介教授（高等教育研究開発推進機構長）が「閉会の辞」を述べ、この活発な議論や問題提起を受けて、さらに具体的な成果を目指して交流会プロジェクトを今後引き続き発展させていくことが確認されました。

■ 交流会プロジェクトの態勢再構築へ

その後日、学生実行委員と教職員とが集まり、第2回学生・教職員教育交流会の反省をおこないつつ、今後の活動の方向性やプロジェクトの組織態勢について議論をおこないました。その結果、まず組織態勢については、これまでの4つのWGの態勢を見直し、それらの成果を継承しつつも、より柔軟に学生・教職員のネットワークを発展させるような新しい態勢へと移行していくことで合意しました。新しい組織態勢の具体的な姿は、この『共通教育通信』が皆さんのお手許に届く頃にはホームページ等でご紹介できるのではないかと思います。

■ 新たな始動——「交流カフェ」の開催

第1回

次に今後の活動についてですが、まず新たな試みとして、プロジェクト外部の学生・教職員も自由に参加することができ、ざっくりばらんに京都大学の教育や学びのあり方について意見を交換できるようなオープンな議論の場として「交流カフェ」という集まりを開催することになりました。

第1回「交流カフェ」は「シラバスのあり方」を考える」をテーマとし、11月21日に吉田南1号館で開催されました。このテーマ設定は、第2回学生・教職員教育交流会の各分科会で「シラバスのあり方」が共通して話題になったことを受けたものです。当日は、プロジェクト外から含む学生・教職員約20名が参加し、茶話会形式で活発な意見交換がおこなわれました。学生は授業選択の際にシラバスをどの程度、またどのように利用しているか、シラバスに求められる内容とは何か、アメリカの大学のよう（1



科目数ページにも及ぶ詳しいシラバスは必要なのかといった話題を経て、教員から学生へのメッセージ・教員はどんな学生を求めているか、学生に何を期待しているのか）を伝えることの重要性という点に議論が集中しました。さらには、シラバスの将来像の展望として、授業に対する学生の感想や意見を掲載し、学生と教員とがインタラクティブに発展させていけるシラバスは考えられないだろうかという提案もありました。

第1回「交流カフェ」でのこれらの議論を踏まえ、今後はより具体的なシラバスの改善案を交流会プロジェクトからの提言としてまとめいき、次回の「交流カフェ」では、全学共通科目を担当する教員のグループ（たとえばA群科目部会）との懇談会形式でその提言を伝えてはどうかという案が検討されています。

■ 交流会プロジェクトのその他の活動

この「交流カフェ」に加え、交流会プロジェクトでは、平成18年度「自主研究ゼミ」の企画（平成17年度のポケット・ゼミとは異なり、実質通年で開講されるAB群科目となります）、大阪大学との交流による「京阪ゼミ」の企画、平成17年度2回生進級時アンケート報告書の作成と平成18年度同アンケートの企画、および「京都大学教員オフィスアワー・検索システム」の改善などの諸活動にも取り組んでいます。

交流会プロジェクトでは、京都大学の教育の今・これからに真摯な関心を寄せる学生・教職員の皆さんからの建設的なご意見ご提言、さらにはプロジェクトへのご参加を心よりお待ちしております。今後ともご支援ご協力のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。



交流会プロジェクトに取り組む学生実行委員を随時募集しています。お気軽にお問い合わせ下さい。

（吉田純 高等教育研究開発推進センター教授）

問い合わせ先: q-a@pack.k.kyoto-u.ac.jp

プロジェクト公式サイト: <http://pack.k.kyoto-u.ac.jp/>

新入生に向けて

新入生のみなさん、ご入学おめでとうござい
ます。

僕が大学に入って最初に驚き戸惑ったこと
は、その規模の大きさと自由さです。毎日決
まった時間に登校しなければならぬわけ
もなく、決まったメンバーと顔を合わせるわけ
でもない。膨大な数の授業があり、どれを取っ
たらいいのかさっぱり分からない。サークルに
しても膨大な数の新歓ピラを目の前にしてど
う選んでいいのかさっぱり分からない。身の回
りに入学前からの知り合いもいなかったの
で、一緒に相談しあう人もいない。あまりに縛り
がない状況に、何をどうしたらいいのか分から
ず不安になったりもしました。

そんな中で僕が大切だなと思ったことが3
つあります。1つ目は常にアンテナを張ってお
いて、自分がおもしろいと思える情報を逃さ
ないようにすることです。例えば、一般教養は
無意味でおもしろくない、という意見もあり
ますけど、あれだけの数の授業の中には内容
への興味や先生との相性でおもしろいと思え
る授業があるはず。この授業はおもしろ
いらしい、という情報を逃さないようにしてお
いて、そういう授業はとりあえず1回受けて
みて損はないと思います。自分に合わなかつた
らいつでもやめればいわけですし、どうせ単
位は集めなくてはならないなら、せっかくだか
ら中にはおもしろくて楽しみに受けていたな
と思える授業があるといいなと思います。

2つ目は最初ちよつとがんばつても社交
的になつてみることです。この大学には、学年
約3000人も人がいるわけですから、本
当にいろんな人がいて、たくさんのお会いの可
能性があります。

最初ちよつと勇気を出していろいろな人と
話してみる、そうしてただの顔見知りから二
歩進んで、しゃべれる人を増やしていけば、中
にはきつと本当に気が合う友達が見つかると思
います。

3つ目はうまく時間を使うことです。毎朝
きちんと起きて学校に行つて授業を受ける、
それはもちろん大切なことですが、それだけ
が大学生活でもないと思います。授業、バイト、
サークル、人付き合い、などをうまくバラ
ンスを取ること、一方、ときには他のものを犠
牲にしてもこれだ！と思うものにかける時
間も大切ではないでしょうか。そのとき思った
ように思い切つて行動してみる、それもつの時
間の使い方だと思えます。サークルや勉強にひ
たすら打ち込む人もいます。たまには朝どこ
ろか昼まで友達と飲みながら意味のない話を
していた、とか、一日中学校にも行かず家に二人
でいた、なんて時間の使い方方も大学生ならでは
なのではないでしょうか。

大学生活は動き出してしまえば本当にあ
つという間だと思えます。これから4年間の学
生生活を思いっきり楽しんで充実したものに
してください。

去年の9月30日に京大の様々なサークルによる合同イベント、「吉田南サークルフェスティバル」を開催しました。

サークル活動を行っている学生達の組織である吉田南教室使用サークル連盟が主催、吉田南構内の施設を管理する高等教育研究推進機構の後援で行われました。

吉田南教室使用サークル連盟とは、吉田南キャンパスの教室を利用して活動しているサークルの連合組織です。様々なサー

クルが一体となって大学側と定期的に話し合い、教室の貸し出しを始めとする課外活動の環境を、学校側との信頼関係に基づいて充実させていくことを目的としています。

2005年末時点で45サークルが加盟しています。

大学で3年間サークル活動をしてきて、連盟担当となつてつづいたことがあります。僕は音楽サークルに入っているのですが、みんな程度の差こそあれ、それぞれなりに自分の大学生活をかけてサークル活動をしています。連盟内で他サークルの人達と話し合いをしていくうちに、当然のことですがどのサークルの人たちも同じように自分たちのサークルの活動に情熱を傾けているのだ、ということを感じました。活動内容も違い接点も無いサークル間には関係が希薄になりがちです。

でも、せっかくだから、もし一緒にステージに上る機会があったら、また他のサークルに友達ができてお互いのステージを見に行き合うことができたらどれだけ楽しいだろうと思いました。そんな気持ちから、サークルの合同イベントであるサークルフェスティバルが生まれました。



吉田南サークルフェスティバル

YOSHIDA-MINAMI-CIRCLE FESTIVAL

そしていよいよ当日、一番の心配だった天気にも恵まれ、ステージを設置した総合館北棟のアーチ部分は、まるでこのためにあるのじゃないかと思うほどぴったりのいい雰囲気でした。ステージ後方の吉田南正門前広場には生ビールを始めとしたお酒やソフトドリンクを配るテントを設置し、遊びに来てくださった方々に自由に飲んでもらえるようにしました。

軽音サークルこんべいというバンドによるライブでスタートしたステージは、大道芸倶楽部 Juggling Donuts、アコースティック音楽のアンブラダド、民族舞踊研究会 K V K によるジブシーの踊り披露、クラシックギター中心のギタークラブ、奇術研究会によるステージマジックショーと続き、吹奏楽団の迫力あるスカの演奏で締めくくられました。多彩なステージを見ることができ、個人的には夢のようなあつという間の4時間でした。もし見に来てくださった方々も同じように、お酒を飲みながら、話をしながら、思い思いにステージを楽しんでもらえたなら本当にうれしいです。

最後にこの場をお借りして、後援として親身な支援をいただきました高等教育研究開発推進機構、共通教育推進部の方々、趣旨に賛同し寄付を頂きました方々に心から御礼申し上げます。そして準備を進めてくださったみなさん、出演してくださったみなさん、遊びに来てくださったみなさん、本当にありがとうございました。今年度も第2回を開催すべく準備を進めていますので、そのときはぜひ遊びに来て下さい。

吉田南教室使用サークル連盟

サークルフェスティバル担当





民族舞踊研究会

季節によって様々な情緒を見せる吉田キャンパスで、遠く聞こえるヴァイオリンや琴の音色を追いかけていくと、築何年経とうかという古い木造の建物が目に入ります。恐る恐る階段を上っていくと、不思議な音楽とリズムがふと聞こえてきます。京大を散策ついでにそんな体験も如何でしょうか？

私たち民族舞踊研究会は、ヨーロッパやバルカン地方や中近東地方を中心に世界約30カ国の民族舞踊を嗜んでいるサークルです。ひと口に民族舞踊と言っても、それぞれの文化によって特有の音楽と踊りのモチーフと衣装があり、奥深いものがあります。具体例を挙げればきりがありませんが、スコットランドのバゲパイブの演奏やキルトスカート、ブルガリアの女性混声合唱、またロシアのベントキック等をご存知の方がおられると思います。

このような多様な民族舞踊を、吉田寮前にある学生集会所二階にて、毎週火曜日・土曜日に、部員数30人でひっそりとですが和気あいあいと活動しています。少しでも興味がありましたら、是非足を運んでみてください。

<http://www.geocities.co.jp/CollegeLife/4294/>

サークル紹介

学生生活の大きな柱の1つにクラブ・サークル活動がありますが、皆さんは京都大学にどのくらいのクラブ・サークルがあるか知っていますか。公認団体だけで文化系が約100団体、体育系が約90団体あり、日々様々な活動をしています。このほかにも学外を含む多くの様々なサークルがあり、その数は星の数ほど☆☆☆このコーナーでは、公認団体を中心に紹介しています。

我々、TRPGサークル采は、TRPG（テーブルトーク・ロールプレイング・ゲーム）を遊ぶサークルです。

TRPGとは、数人が集まり、ルールブックとサイコロを使って遊ぶゲームです。簡単に言えば、人間同士でやるコンピュータRPG、言葉で行う即興劇：という感じですよ。

一人はGMと呼ばれる進行役となり、残りはプレイヤーと呼ばれます。プレイヤー達はルールに基づいて自分の分身となるキャラクターを作ります。GMは、キャラクターが今置かれている状況を説明し、プレイヤー達は、その状況だったら、キャラクターはどうするかを考えると、じゃあこうしよう」とGMに返します。その言葉に合わせ、GMは状況の変化をプレイヤーに伝える、という風にゲームは進みます。成功するかどうかが偶然が作用する行動は、サイコロを振って決定します。

GMは波乱万丈の冒険を用意し、プレイヤーはその登場人物となってそれを楽しむ。そんな体験ができるのがTRPGです。興味をもたれた方は、「リプレイ」をぜひ一読ください。富士見などの文庫で市販されているほか、ウェブにも数多く掲載されています（我がサークルのサイトにも）。

我々は、毎週土曜日に集まり、TRPGを遊んでいます。また、土曜日以外に休みには集まって遊んでいることもあります。興味のある方はぜひ、遊びに来てください。



<http://rpg-sai.hp.infoseek.co.jp/>

さい
TRPGサークル「采」



京都大学 11月祭事務局

<http://nf.fan.gr.jp>

—November Festival—それは京都大学において行われる一大イベントです。大学では、高校までと違って学校単位でのまとまった活動はほとんどありませんが、この11月祭は違います！その規模は関西最大級(!)で、多くの京大生が企画を打ち、多くのお客さんが訪れます。その11月祭を創り上げていくサークルが私たち11月祭事務局です。11月祭事務局では、その名の通り、一般参加の企画の対応や会計などの事務的なものはもちろん、広報活動や予算獲得のための広告取り、他大学学祭実との連携、そして自らが主催する企画の運営など、11月祭に関する様々な活動を行っています。他では絶対に経験することのできない実務的な仕事は非常によい社会勉強になり、新入生には特におススメです。もちろん仕事だけではありません。仲間同士で語り、飲み、遊び…で、自然と一緒にいる時間が長くなり、事務局員同士の仲は濃く一生ものです。ゼヒネ南側のBOXに遊びに来てください☆事務局員一同歓迎しますよ。もっと事務局を知りたいという方は直接BOXに遊びに来るか、<http://nf.fan.gr.jp>、もしくはNF通信という紹介冊子を見てください！共にNFというでっかいものを創ってみませんか？

アンプラグド

僕たち『アンプラグド』は生の音での演奏を楽しむサークルです。楽器はアコースティックなものなら何でも良く、アコースティックギターを始め、ブルースハープ、ピアノ、バイオリン、ウッドベース、サクソ、ボンゴ、カホン等があります。

ライブや普段の例会で演奏する曲を少し挙げると、Eric Clapton、The Beatles、押尾コータロー、山崎まさよし、斉藤和義、Mr.Children、aiko、中島美嘉、葉加瀬太郎…と、ジャンルも様々です。好きなアーティストの曲を練習するのはもちろん、オリジナル曲を作って路上ライブやライブハウスで演奏しているメンバーもいます。

サークルの活動は毎週月、金曜日に大学の教室(吉田南4号館)を借りての練習、大学の教室やライブハウスなどでのライブを中心に、新歓コンパ、夏合宿、NFライブ、忘年会、スキー旅行などのイベントも行っています。

とにかく音楽好きの集まったサークルなので、音楽を通しての新しい友達との出会いや、今まで知らなかった新しい音楽との出会いもきっとありますよ。アコースティックな音楽が好きな方、経験未経験、ジャンルも楽器も問いませんので一緒に『アンプラグド』な音楽を楽しみましょう！

<http://kyoto.cool.ne.jp/unplugged/>



施設の紹介



「自由の鐘」



「杉谷ムセン 杉谷さん」



「鐘を鳴らす機械」 木でできている柄の部分が動くことで鐘を打つ仕組みになっている

1 耳をすませば ～自由の鐘～

正午に鳴り響く鐘の音に耳をすませてみよう。吉田南総合館北棟の塔屋にある「自由の鐘」は、毎日12時になるとお昼を告げる鐘を鳴らす。聴いていると一定のリズムで12回打つ。一方、東二条通りを挟んだ時計台の塔の北側にも鐘が設置されているのはご存じかと思うが、その二つの鐘の音色が微妙に異なっているというところまで感じている人は果たしてどのくらいいるのだろうか。今回は吉田南総合館北棟にある「自由の鐘」について、鐘を鳴らす機械を製作した(有)杉谷ムセンの杉谷さんにお話を伺い、それについて少し触れてみたいと思う。

「自由の鐘」についての歴史は、京都大学教養部の前身の三高時代にまでさかのぼる。当時は授業の始まり、終わりを告げる鐘として使われていたが、学園紛争の際に取り外され総合人間学部図書館に長い間保管されることとなった。それが吉田南総合館北棟が完成するに伴い、その塔屋にかかけられ再びその音色を響かせることとなった。

話は戻るが、自由の鐘と時計台の鐘との音色の違いは、鐘の材質によつて音が異なるそうだ。時計台が鑄鉄製、「自由の鐘」が青銅製。「自由の鐘」の澄んだ音色はこの碧みがあった銅によるところが大きい。また鐘の打ち方も違いがあつて、時計台の鐘は外側から打つ形だが、「自由の鐘」は鐘の内側を打つ設計を行っている。その理由は、三高時代から取り外されるまで人力で鐘の内側をたたいていたからとのこと。それを忠実に再現し、当時の鐘の音色を蘇らせたいという思いからだ。杉谷さんのこだわりはこれにとどまらない。人が鐘を鳴らすときのテイクバック、スイング、鐘に当たる角度等を研究し、まるで人が実際に鐘を打つるように動作する機械を製作している。

お話している杉谷さんの表情からは仕事に対する誇り、喜び、愛情というものがにじみ出ている。京都大学で学ぶ全ての人が耳にする「自由の鐘」への強い思いが伝わってくる。今一度、京都大学に鳴り響く鐘の音に耳をすませてみよう。

深く知ること

副機構長 高橋 由典

2 吉田南構内メイン道路

昨年8月から9月にかけて、吉田南構内の中央を南北に貫く吉田南1号館から学術情報メディアセンター南館までの道路（以下、メイン道路と呼ぶことにする）がリニューアルされました。以前は、吉田南1号館手前に自転車で立ちこぎしなれば上れないような急勾配があり、当然車椅子も自力で通ることができませんでした。また、道のところどころに凹凸があったり、工事でアスファルトを切り欠いた後が残っていたりで、雨の日になると道には大きな水たまりがあちこちにできて嫌な思いをしたものです。

今では正門前広場の並木道を通り、奥に見える吉田南総合館中庭を望みながら北棟の脇を抜け、大きなモミジバフウが並ぶメイン道路へ続き、構内の主要動線が緑溢れる豊かな屋外空間を作り出しています。



リニューアル後(現状)



リニューアル前

(施設管理掛 舟尾 基)

大学生の頃の私は教養とか知性といった言葉が苦手だった。そういう高尚なことは自分には縁がない。そんな風に思っていた。むろんだからといって、反知性主義に傾いていたわけではない。勉強することはそれなりに好きだったのだが、知識の体系を自分の実感を飛び越して蓄積するのが嫌だったのだ。教養についてのその感じ方は基本的には今でも変わっていない。変わったのはポジションだ。今は学生ではなく、教養教育は大切だと説く側にいる。教養についての違和感と教養教育は大事だとの主張は、どこでどうつながるのか。

かつての違和感についてももう少し語ってみよう。私が教養に違和感を覚えたのは、教養の所有や獲得(何か新しい知識を仕入れること)が、所有・獲得する当人の実感とはかけ離れたところで行われている、と思ったからだ。教養の大伽藍の前では、実感などといったナイーヴな事柄は歯牙にもかけられない。実感の有無などといった素朴なことを言っている限り、教養人にはなれない。そんな気がしたのだ。

こう考えると、私の違和感は教養そのものというより、「教養との付き合い方」に向けられたものであったことがわかる。モノを所有するのと同じような仕方でも教養を所有しようとするセン

スがたまらなかつたのだ。所有された教養はときに自己誇示の資源として動員されたりもしていた。これもたまらなかつた。こうした訳で若いころの私はいわゆる教養を遠まきに眺める位置に立っていたように思う。

何十年も前に感じた違和感について書きながら、思わずうなずいてしまう。今でも多少共感しているところがあるのだ。ただ現在の私はかつての違和感に全面的に同調しているわけではない。獲得とか所有といった言葉で括られない「教養との付き合い方」もありうると思っているからだ。何十年もの間にいろいろ「教養との付き合い方」の実例に出会い、認識が徐々に変わっていった。経験というのも馬鹿にできない。

獲得とか所有といった言葉で示される「教養との付き合い方」は、知識の量的な加算のイメージを喚起する。広く・多く知ることがそこでテーマだ。これに対し、知ることの深度を問うという「教養との付き合い方」もあるのではないか。ものごとを広く・多く知るのではなく、深く知るといふ態度である。深く知るといふ「教養との付き合い方」に実感は欠かせない。そのことを根拠に、かつて教養にそっぽを向いた当の私が、教養教育の大事さを訴えているという次第なのだ。

スナップ写真大募集!!

キミの撮った写真が次号の表紙になるかも・・・

「共通教育通信」では、スナップ写真を使って表紙を制作しています。日常の何気ない風景、最近興味があるもの、友達とのスナップなど何でもかまいません。みなさんがカメラ付き携帯電話（デジタルカメラでも可）で撮影した写真を下記アドレスまでお送りください。

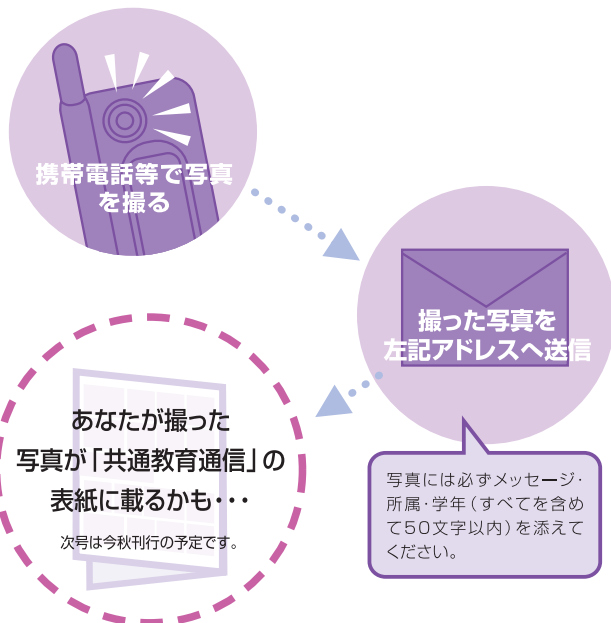
本誌に対するご意見、ご感想も同アドレスで受付けています。

京都大学共通教育推進部

E-mail:kouhou@k.kyoto-u.ac.jp
(TEL:075-753-6509 FAX:075-753-6691)

なお、お送りいただいた写真すべてを掲載できない場合がありますのであらかじめご了承ください。

著作権や肖像権の問題により掲載できないものもあります。著作権の確認、人物を撮る場合には掲載の承諾をもらってからお送りください。



表紙の写真紹介



1. 11月祭「自作レーシングカーの展示と試乗」フォーミュラプロジェクトKART
2. 11月祭「スピードガンコンテスト」野球部
3. 11月祭「NON STYLE」、「りあるキッズ」Special Live客席
- 4.16. 11月祭 吉田南構内グラウンド
- 5.8.15. 工学研究科 名誉教授 藤本孝先生撮影：吉田神社
- 6.10.13.17 吉田南構内プロムナード
7. 平成17年度合格発表
9. 11月祭 吉田南構内正門
11. 吉田南構内：雪で作ったドラえもん(2005.12.21)
12. 吉田南構内中庭
14. 11月祭「マフィア団リターンズ」熱気球サークル
18. 学生部
19. 11月祭「メイド喫茶」龍
20. 11月祭「似顔絵」美術部
21. 11月祭 吉田南構内

表紙に関する写真撮影にご協力いただきありがとうございました。